広島市立大学学術リポジトリ

英語学習者の冠詞判断に関する一考察：日本人大学生を対象として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 信之, AOKI, Nobuyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://hiroshima-cu.repo.nii.ac.jp/records/294

Hiroshima Journal of International Studies Volume 6 2000

英語学習者の冠詞判断に関する一考察

——日本人大学生を対象として——

青 木 信 之

A Study of Japanese University Students' Judgments on English Article Use

Nobuyuki AOKI

The English article system is one of the most difficult aspects of grammar for Japanese learners to master. One reason for this difficulty is that Japanese junior and senior high school English classes mainly focus on reading, and especially sentence-level grammar-translation exercises, which tend to ignore the information carried by English articles. This paper, using a cloze test and protocol analysis, investigated the use of English articles by Japanese university students and the judgment behind their article use. The results showed that they often failed to combine the judgments necessary for choosing a right article, and that some of their wrong judgments were also characterized by negative transfer from Japanese translation.

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 英語冠詞の用法
Ⅲ. 先行研究の概観
Ⅳ. 調査
Ⅴ. 結果と考察
Ⅵ. まとめと課題
Ⅶ. 参考文献
Ⅷ. Appendix

Ⅰ. はじめに

冠詞システムをもたない日本語を母語とする英語学習者にとって，英語の冠詞を学習することは非常に困難である（Grannis 1972; Whitman 1974; Master 1990）。しかし学習が困難であるにもかかわらず，冠詞について授業で体系的に教えられることはほとんどないようである。その理由としては，冠詞体系が複雑で例外に満ちていること，そして教える側の教師自身も冠詞使用に自信をもてないということ，さらに訳読中心の授業では冠詞はほとんど情報価値をもたないので，教える側も教えられる側も冠詞に注意しないことが挙げられる（山田 1981）。

冠詞について体系的に，たとえば1時間にわたって教授された経験があるかどうかを，筆者があるクラスで大学生に聞いたところ，中学，高校を通じてそうした学習経験はないとクラス全員が答えた。また教科書のなかでも冠詞に関する記述は極めて少ないことも指摘されている（浅野 1988）。要するに冠詞の学習については教授されている部分はほとんどなく，基本的に「習うより慣れよ」で学習しているのが現状のようである。

最も苦手な文法項目の一つであり，かつほとんど体系的に教えられることのない冠詞を，日本人学習者がどのように判断し使用しているか，クローズテストとプロトコル分析を用いて調べることが本論の目的である。

キーワード：英語教育，英語冠詞，日本人大学生，冠詞機能，冠詞判断プロセス，プロトコル分析，冠詞クローズテスト

Ⅱ．英語冠詞の用法

さまざまな文法書で冠詞の項目をみると，冠詞の規則が例外とともに数頁から数十頁にわたって記載されている。一般的に不定冠詞の用法，定冠詞の用法といった具合に冠詞の種類ごとに記述されているが，これらの箇所を読んでも，一つの体系としてなかなか頭に残りにくい感がある。一つ一つ冠詞と名詞の組み合わせ方を暗記しても，有機的に体系づけて理解できないので，常に冠詞の使い方について悩むことになる。

一方，冠詞の習得に関する先行研究のいくつかは，名詞の種類を機能別に分類し，それぞれにどの冠詞がつくかという視点から研究を行っている（Huebner 1979; Parrish 1987; Tarone and Parrish 1988; Thomas 1989）。名詞の機能からみた冠詞の用法を，Huebner (1979) をもとに簡単に述べると，まず名詞が特定の指示対象をもつか否か，そして聞き手あるいは読み手が，その名詞を同定できるか否か，という二つの判断の組み合わせで使われる冠詞が決まってくるというものである。Huebner は，前者の違いを “Specific Referent” をもつか否かという意味で［±SR］，後者の違いを聞き手がすでに知っているものか否かという意味で，“Known to Hearer” ［±HK］としている。そしてこれらの組み合わせを考えると4通りの組み合わせができる。

しかし，不定冠詞，ゼロ冠詞を適切に使用するには，Huebner (1979) のこの4つの分類に加えて，さらにその名詞が可算名詞か否かの判断と，それに基づいた単数，複数の判断が必要になる。この可算不可算の判断は日本人学習者にとってさらなる困難点となる（Yoon 1993; Takahashi 1995）。この可算不可算という点も［±Count］として組み合わせ，Huebner (1979)，Thomas (1989) を参考に冠詞の用法を表1に示す。表中の例文は，Berry (1993)，大西＆マクベイ (1995)，正保 (1996) を参考にした。

もちろん，イディオムや固有名詞などにはこの原則にあわないものも多くある。それらもまた学習者を悩ます大きな原因である。しかし，一般的な冠詞の用法としては大体表1のようになる。

次節からは，この表をもとに［±SR］，［±HK］，［±Count］の用語を使う。

Ⅲ．先行研究の概観

前述したように，冠詞システムの習得は日本人学習者にとって困難なものであるが，冠詞習得について調べられた先行研究はそれほど多いとは言えない。その理由として冠詞は習得がむずかしいわりに，コミュニケーション自体に直接影響することが少ない言語項目であるということが指摘できるであろう。冠詞の誤使用によって意志疎通ができなくなるといったことが比較的少なく，そのためそれほど注目されず，また体系的な指導が考えられることがほとんどないのであろう（McEldowney 1977）。

それほど多くはないが，冠詞習得についての先行研究を分類してみると，1）冠詞の習得順序，つまり他の形態素と比べて冠詞がいつ習得されるかについての研究（Brown 1973; Dulay and Burt 1974; Bailey et al. 1974; Hakuta 1974; etc.），2）ゼロ冠詞，不定冠詞の a と an，定冠詞の the の4種類の冠詞の習得順序についての研究（Huebner 1979; 高見 1982; Yamada and Matsuura 1982; Parrish 1987; 浅野 1988; Tarone and Parrish 1988; Thomas 1989; Yoon 1993; Takahashi 1995; etc.），3）冠詞システムの効果的な教授法についての研究（Whitman 1974; McEldowney 1977; 山田 1981; Lindstromberg 1986; Master 1990; etc.）に大別される。ここでは本研究に関連する 2）に絞っていくつか先行研究をみていくことにする。

まず冠詞の種類別でその習得をみたものからみていく。日本人高校生と大学生を対象にクローズテストを用いて冠詞習得を調査した Yamada and Matsuura (1982) は，定冠詞の定着が最も容易であること，ゼロ冠詞は高校生には難しいがその後早い向上をみせること，それに対して不定冠詞は上級レベルになっても最も困難なものとして残ることを示した。学習者のレベル別にみると，中級学習者にとっては，易から難に定冠詞－不定冠詞－ゼロ冠詞となり，上級学習者にとっては，定冠詞－ゼロ冠詞－不定冠詞となる。また誤答の多くは，定冠詞の過剰使用が原因であるとしている。さらに定冠詞の使用において最も容易なのは，同じ名詞のくり返し，つぎに同意語，そして後置修飾によるものが最も難しいということも指摘している。

海外に留学した日本人学生を4カ月にわたって長期観察した Parrish (1987) も，定冠詞が84%もの高い定着率を示すこと，不定冠詞は50%程度の定着率

表1　名詞意味機能別による冠詞カテゴリー

[±SR]　：名詞が唯一の指示対象を有するか否か
[±HK]　：聞き手，読み手がその名詞を同定できるか否か
[±Count]：その名詞が可算名詞か否か

タイプ1
[+SR]/[+HK]/[+Count]　特定唯一の対象，再出現の名詞など。
該当する冠詞：the
例：The pope, the sun
　　Ask the guy over there.
　　Please look at the end of the chapter.
　　A：So he married a woman from England.
　　B：Yes, the woman is from London.

タイプ2
[+SR]/[+HK]/[−Count]
該当する冠詞：the
例：Bring the water on the table for me.

タイプ3
[+SR]/[−HK]/[+Count]　初めて出現する名詞など。
該当する冠詞：a/an，ϕ（複数の場合）
例：My dad gave me a car.
　　Our house has a garage.
　　Once upon a time there was an old man.

タイプ4
[+SR]/[−HK]/[−Count]
該当する冠詞：ϕ
例：She gave me ϕ water, not ϕ tea.

タイプ5
[−SR]/[+HK]/[+Count]　総称。
該当する冠詞：the，a/an，ϕ
例：The lion is a beautiful animal.
　　ϕ Lions are beautiful animals.
　　A lion is a beautiful animal.
　　The computer has a flexibility of function.
　　The Chinese, the Russian

タイプ6
[−SR]/[+HK]/[−Count]
該当する冠詞：the，ϕ
例：ϕ Gold will not buy anything.
　　They ran into ϕ difficulty.
　　The boy is always glued to the television.

タイプ7
[−SR]/[−HK]/[+Count]　分類や否定の場合など。
該当する冠詞：a
例：He's a nice man.
　　Alice is an accountant.
　　I don't see a pencil.

タイプ8
[−SR]/[−HK]/[−Count]
該当する冠詞：ϕ
例：I didn't have (any) advice.

で，ゼロ冠詞については判断できなかったことを報告している。

高校1～3年生を対象に冠詞クローズテストを行った浅野（1988）は，初出の具体名詞につく不定冠詞，及び既出の名詞につく定冠詞については高い正答率であったが，冠詞の総称，その中でもゼロ冠詞の正答率が低かったことを報告している。

これらの研究から，定冠詞，不定冠詞，ゼロ冠詞のそれぞれの習得について少々荒っぽいまとめ方をすると，定冠詞が早く習得されること，不定冠詞やゼロ冠詞の習得はそれより遅れること，そして定冠詞が過剰使用されることにまとめられる。

第1節でみた［±SR］［±HK］の名詞機能の分類を用いて，冠詞習得を調査したものをつぎにみてみる。Huebner（1979）はラオスからの難民を一年にわたって観察している。従来の obligatory context を利用した習得分析方法でみれば化石化しているとしかみえない学習者の冠詞使用を，上記の［±SR］，［±HK］という分類を用いてみてみると，徐々にその中間言語は洗練されてきており，特に［+SR］［+HK］における定冠詞使用に発達がみられたと報告している。

Tarone and Parrish（1988）は冠詞使用の抽出方法の違いが，どのように使用の正確さに影響を及ぼすかをみている。それによればインタビュー等の口頭でのテストのほうが，間違いをみつけるような文法テストよりも，冠詞使用が圧倒的に正確であったとしている。また口頭テストでは［+SR］［+HK］や［−SR］［+HK］は，［+SR］［−HK］よりも正解率が高かったと報告している。つまり特定可能な名詞につける定冠詞や総称に使う冠詞のほうが，談話中初めて言及するときに用いる不定冠詞や無冠詞よりも正解率が高かったということを指摘している。

日本人学習者13名を含む30人の L2 学習者を対象に，絵を描写する課題を用いて冠詞使用を調べた Thomas（1989）は，［+SR］［+HK］環境での定冠詞使用が早く定着すること，不定冠詞の使用が正確でなく，［+SR］［−HK］において定冠詞の使用が多いことを明らかにした。要するに［+SR］［−HK］，つまり初出などの名詞に定冠詞を過剰使用する傾向がみられたことを述べている。

これらをまとめると Yamada and Matsuura（1982），Parrish（1987），浅野（1988）らが示したと同様，定冠詞の定着，特に［+SR］［+HK］環境での定冠詞使用は高い定着率を示すことを明らかにしたと言えるだろう。

前に触れたが，正しい冠詞の使用には，さらにその名詞が数えられるか否か，そして単数か複数かという判断が必要である。このことが日本人学習者にとって冠詞習得をさらにむずかしいものとしている。例えば，Yoon（1993）はアメリカの大学院に在籍する27人の日本人学習者を対象に，名詞の可算不可算判断がどのように不定冠詞とゼロ冠詞の使用に影響しているかを英語の母語話者と比較して調査している。そして母語話者の不定冠詞及びゼロ冠詞使用は，文脈を考慮して行われるのに対し，日本人学習者の場合は名詞そのものの可算不可算判断が，文脈を超えて不定冠詞，ゼロ冠詞の使用に影響を与えていることを明らかにした。また，Takahashi（1995）も，日本人大学生の初級学習者と上級学習者の違いの一つは，抽象名詞に対して正しい冠詞使用ができるか否かであると述べている。

以上，冠詞の種類別や名詞の機能からその習得状況をみたもの，また名詞の可算，不可算という観点から習得を調べた先行研究をみてきた。しかし，学習者がどのような判断基準で冠詞を使用しているかについては，いずれの研究も定着率や正解率から間接的に推測しており，直接的に学習者の判断を調べているわけではないことが指摘できる。

Ⅳ．調　　査

本調査の目的はクローズテストとプロトコル分析を併せ，日本人学習者の冠詞使用にできるだけ直接的に迫り，その判断の一端を解明することである。

調査参加者は，英米文学専攻の大学1年生29名と3年生16名の計45名である。標準テスト等を実施するなどして基礎データをとっていないが，経験的に被験者群の英語力を TOEIC で換算すれば，1年生が400点前後，3年生が550点前後である。ただし，1年生にも英語力の高い者，そして3年生にも英語力の低い者がそれぞれ存在するので，全体としてみれば両学年の間に大きな差があるというよりは，その差は連続的なものとして考えられる。

調　査　1

1998年4月に，“Is Everything on TV real?”（*Sunshine English Course II*，開隆堂 1994年）という高等学校の英語教科書に掲載された英文を用いて，冠詞クローズテストを実施した（Appendix 参照）。様々な名詞タイプが均等に出現するように単文を集めたものでなく，ひとつの長い英文を使った理由は，

冠詞の判断には文法知識に基づく判断以上に，内容に関する判断が大きく関わっており，読解力を必要とする長文のほうが，より実際の冠詞使用判断を浮き彫りにできると考えたからである。

調　査　2

1998年の4月時に行った冠詞クローズテストにおいて，53問中37問（正解率70%）正解した学生2名（H.M., Y.M.）を上位群，27問（正解率51%）と28問（正解率53%）正解した学生2名（M.Y., H.C.）を下位群として，1998年11月に再び同じ英文をもちいてクローズテストを行い，その冠詞判断プロトコルを収集した。具体的には被験者はクローズテストを行いながら，頭のなかに浮かぶことをすべて調査者に報告するよう求められ，横に座った調査者はその報告をテープ録音した。

V. 結果と考察

調査1の結果を調査2から得たプロトコルデータで補足する形で考察していく。また調査1の結果から上位群（10名，平均正解率72%），下位群（10名，平均正解率44%）に分類し，その比較も併せて分析資料とした。本文に書かれている冠詞以外にも他の冠詞が入りうるものについては，英語を母語とする大学教員に注意深くチェックしてもらい，2つ以上の冠詞が入るもの，イディオム及び形容詞の最上級形のものは分析から除外した。

調査に用いた英文に現れた冠詞はタイプ1，タイプ3，タイプ5，タイプ6とタイプ7で，タイプ3は1回，タイプ2，タイプ4，タイプ8は皆無であった。よって，タイプ2，タイプ3，タイプ4，そしてタイプ8は調査対象からはずした。

タイプ5については2種類に分けて分析する。一つは総称である。もう一つは総称以外で，タイプ5と分類される名詞である。たとえば，“We need a girl who can speak Italian.” は後置修飾されているが，イタリア語を話す女性は多くいるので特定されているとはならない。これは上記の分類で言えば，[−SR] [+HK] [+Count] になると考えられる。つまり後置修飾されているので，どういった女性であるかは聞き手にわかり [+HK] となる。これを聞き手にも理解できないとするとタイプ7に分類されるが，後置修飾はタイプ1においても [+HK] と判定されており，その判断に習うと [+HK] となる。そして唯一の対象ではないので，[−SR] となる。したがって，一応タイプ5と分類せざるを得ないが，一般的なタイプ5つまり総称とは異なるので Type 5* とし，別分析とする。またタイプ6ではこの後置修飾が現れなかったので，タイプ5だけを2種類に分けて分析した。

表2　タイプ別正解率

Article	Type 1	Type 5	Type 5*	Type 6	Type 7
出現個数	14	9	8	5	17
正解率平均(%)	49.9	60.3	37.5	40	48.6
標準偏差	23.9	15.8	12.5	2.4	14.2

Type 5* は総称以外の Type 5

表3　分散分析表

変動因	変　動	自由度	分　散	分散比	P 値
タイプ間	0.262	4	0.065	2.281	0.074
タイプ内	1.376	48	0.029		

表4　**Scheffe Test** によるタイプ間の差の検定

タイプ	1	5	6	7	5*
1	1.000				
5	0.718	1.000			
6	0.868	0.341	1.000		
7	1.000	0.590	0.909	1.000	
5*	0.610	0.121	0.999	0.676	1.000

タイプ別の出現個数及び正解率は表2の通りである。

分散分析の結果，タイプ別の正解率には有意ではないが，ある程度差があることがわかる。いずれのタイプ間に正解率による差がみられるか，Scheffe テストによってみてみると[1]，総称のタイプ5と後置修飾によるタイプ5* の間で差がみられる。高塚（1990）や Takahashi（1997）が指摘するとおり，タイプ5* のような後置修飾による冠詞使用は学習者にとって大きな困難点となっており，他と比べて平均点はかなり低い。しかし，全体としてはいずれとも有意な差がなかった。

タイプ別では平均正解率に差はなく，いずれかのタイプにおいて学習者が特に誤答するということはなかった。しかし正解率に差がみられないことが，それぞれのタイプにおける学習者の冠詞選択判断も同様であるということを意味するものではない。正しく冠詞を選択するには，それぞれのタイプに特有の知識や判断が必要である。誤答の原因に迫るには

表5　タイプ1　問題番号別正解率

問題 No.（名詞）	正解率（%）	誤答率（%）	無記入（%）	上位群正解数	下位群正解数	差
27（taxi）	87	（φ: 2）（a: 9）	2	10	10	0
49（lawyer）	80	（φ: 2）（a: 9）	9	9	5	4
48（client）	78	（φ: 7）（a: 7）	9	9	5	4
35（driver）	69	（φ: 0）（a: 29）	2	10	5	5
22（world）	60	（φ: 16）（a: 22）	2	8	6	2
45（screen）	60	（φ: 11）（a: 18）	11	5	3	2
33（screen）	58	（φ: 13）（a: 27）	2	5	6	−1
40（kid）	47	（φ: 11）（a: 31）	9	7	4	3
16（driver）	33	（φ: 7）（a: 56）	4	3	4	−1
19（shock）	33	（φ: 29）（a: 29）	7	4	2	2
53（mate）	31	（φ: 9）（a: 47）	11	1	3	−2
25（doorman）	29	（φ: 11）（a: 58）	2	2	5	−3
47（DA）	24	（φ: 58）（a: 9）	9	3	2	1
29（impression）	9	（φ: 33）（a: 53）	4	0	1	−1
平　均	49.9					

学習者がいかなる情報を利用し解答しているか，誤答の背景にある判断を明らかにしていくことが必要である。ここからは誤答の種類及び頻度，それにプロトコル分析を併せてそれぞれのタイプごとに誤答の原因を考えていく。

タイプ1［+SR］［+HK］［+Count］

最初に表の見方を述べておくと，問題 No.（名詞）は，冠詞穴埋め問題本文中（Appendix 参照）の番号及び名詞である。正解率は45名中何%の学習者が正解したかを示しており，誤答率はゼロ冠詞（φ），定冠詞（the），不定冠詞（a/an）別に%で表したものである。不定冠詞は an を入れた誤答であっても，表中では全て a としている。また各問題について，上位群10名，下位群10名のうちそれぞれ何名が正解したかということと，その差を記している。

タイプ1の正解率をみてみると，上は87%から下は9%まで正解率にバラツキがあり，平均は49.9%である。先行研究でみたように，冠詞のなかで最も習得の早いのが定冠詞と言われているが，書かせたり話させたりしてデータを収集する場合と異なり，こういったクローズテストでは，書き手の判断をどこまで理解できるかという読みの力と密接に関わっているので，正解率にバラツキが大きくでたものと思われる。このことはデータ収集方法によってその習得率が大きく変化することを明らかにした Tarone（1985）や Tarone and Parrish（1988）を裏付けている。

正解率が高いものは，以前に文中に出てきたものを指していることが明らかにわかる名詞である。それに対して正解率が60%を下回るものをプロトコルと併せてみてみると，誤答の原因は大きくみてつぎの2つと思われる。a）文脈や後置修飾などからの限定が理解できないこと，b）不可算名詞であるといったような他の判断が正しい選択を阻害してしまうことである。a）のタイプの誤答とは，読みの不確かさから同一のものを対象としていることに気づかない，またおおよその内容理解はできても，定冠詞をつけるような特定関係をみつけるほどには深く読めないといったものである。たとえば No. 16（"... but [the] driver doesn't have to back into it..."）の "driver" が前出の "a person in an automobile" の言い替えであることに気づかず，一般的な意味合いとして捉えてしまうといったものである。このことはプロトコルでも示されている。「最初にでてきた "person" の言い替えだから」と判断して定冠詞を入れたのは，上位群のひとり Y.M. だけであった。

b）の他の判断要素が障害になるケースとは，たとえば No. 19（"Can you imagine [the] shock when they discover that..."）のように，when 以下が後置修飾していても，shock が抽象名詞であるという判断から無冠詞とするケースである。プロトコルでも下位群の H.C. は「shock は不可算だから」という理由で無冠詞としていた。また No. 29 の "Children

get [the] impression that..." においても抽象名詞で [−Count] であるという判断が先にきてしまい無冠詞としている者がプロトコルをとった4名中，上位と下位にそれぞれ一人ずつ存在した。

No. 19 と No. 29 のいずれにおいても，無冠詞を入れた者だけでなく，不定冠詞とした者も相当数存在する。したがって，名詞の特性に関する判断が正しい冠詞使用を妨げているだけでなく，後置修飾による限定が理解できないことも誤答の大きな原因であることが推測できる。No. 29 は正解率の低さとともに上位群0名，下位群1名ということからもわかるように，このレベルの学習者に非常に難しかったようである。また名詞が母音ではじまることから an を入れてしまうという傾向もみられた。

要するにタイプ1，2の冠詞，つまり [+SR] [+HK] の名詞の場合，前方照応の場合だけではなく，後置修飾等においても限定されて対象が唯一であれば定冠詞がつくこと，その場合可算不可算に関係なく定冠詞がつくということを学習者によく理解させることが必要であろう。

タイプ5（総称）[−SR] [+HK] [+Count]

まず総称のタイプ5をみていく。タイプ5でみられる総称ではすべての冠詞が選択対象となる。つまり，無冠詞でも不定冠詞でも定冠詞でも，それぞれニュアンスは異なるがすべて総称を表すことができる。

この総称のタイプ5に入るものはほとんど "children" であった。誤答の種類をみると [+SR] としてタイプ1と間違って定冠詞をつけてしまう場合が多いように思われる。筆者は一般的な話として "children" を使っていても，何度も本文に出てくることにより，被験者たちは特定できる「子ども達」，つまり [+SR] と判断してしまったようである。

この誤答の原因である特定の仕方は，被験者の読みの不確かさから起因したものなのか，あるいは被験者の独自の解釈，独自の特定の仕方や関連づけによるものなのかわかりにくい。例えば No. 50（"... but the fantasy that is doing harm to [ϕ] children."）は，筆者は子どもというのはほぼ全員テレビをみており，どの子どももこの話の例外ではないとしているので，常に総称を使っている。しかしプロトコルをみると，下位群の M.Y. と上位群の Y.M. がそれぞれ「『テレビを観ている子ども』という意味で限定されているから」とし，特定されたものとして定冠詞を入れている。つまり，ある被験者にとっては「テレビを観ている子ども」と「観ていない子ども」というように分類されており，今までこの文中で対象になってきたのは前者であり，そういう意味で特定されていると考えている。この場合，単に前出によって特定されているとするのではなく，独自に特定関係を想定しているということである。また No. 38（"Kids have a twisted image of [ϕ] hospital emergency wards."）においても定冠詞を入れた者が45名中21名もいた。そしてプロトコルコメントでは上位群の Y.M. が「ここでは緊急治療室というように場所が限定されているから」とコメントして定冠詞を入れている。文中で初めて登場したにもかかわらず，特別な場所ということで特定されていると判断しているのである。このように，いわば現実の切り取り方が異なると，書き手の意図しない特定の仕方をしたり，また書いたりする場合でも読み手の予期しない関連づけをしてしまう可能性がある。

関連づけを行うことや特定関係をみつけることは，

表6　タイプ5　問題番号別正解率

問題 No.（名詞）	正解率（%）	誤答率（%）	無記入（%）	上位群正解数	下位群正解数	差
36 (kids)	87	(a: 4) (the: 0)	9	10	7	3
28 (Children)	71	(a: 0) (the: 20)	9	9	4	5
2 (children)	64	(a: 7) (the: 27)	2	8	5	3
7 (children)	62	(a: 0) (the: 27)	2	7	2	5
51 (children)	62	(a: 0) (the: 27)	4	7	2	5
50 (children)	58	(a: 2) (the: 31)	9	8	2	6
5 (children)	56	(a: 0) (the: 42)	2	7	4	3
10 (children)	56	(a: 0) (the: 42)	2	7	4	3
38 (ward)	27	(a: 22) (the: 49)	4	5	1	4
平　均	60.3					

表7　タイプ5*　問題番号別正解率

問題 No（名詞）	正解率（%）	誤答率（%）	無記入（%）	上位群正解数	下位群正解数	差
11（expectations）	58	（a：7）（the: 31）	4	7	5	2
21（picture）	51	（ϕ: 20）（the: 27）	2	8	2	6
12（show）	42	（ϕ：9）（the: 44）	4	7	2	5
6（sense）	36	（ϕ: 27）（the: 33）	4	6	1	5
37（image）	36	（ϕ: 40）（the: 20）	4	7	2	5
20（place）	31	（ϕ：4）（the: 62）	2	6	1	5
9（world）	24	（ϕ: 31）（the: 16）	4	3	3	0
30（show）	22	（ϕ: 22）（the: 51）	4	4	1	3
平　均	37.5					

ある意味で人間の自由な想像の産物であり，個人の解釈や発想がユニークであることにつながる。そういう意味では読み手と書き手，あるいは聞き手と話し手の間で許容範囲にあるものであればまったく問題ないものである。また外国語の場合は多少のズレがあったとしても，ほとんどの場合読解力の向上とともに，小さいものになっていくことが想像できる。したがってこういった独自の関連づけによる特定，つまり定冠詞使用が英語読解力の向上とともに消滅していくのか，またそうでないのかはさらに調査の必要な課題である。

タイプ5*（総称以外）［−SR］［+HK］［+Count］

ここでは総称ではないタイプ5*の問題を扱う。他のタイプと比較して平均正解率が37.5%とかなり落ち込む。また誤答の多くが定冠詞であることから，後置修飾された場合，大学生日本人学習者が定冠詞を無条件につけてしまうことを報告した Takahashi (1997) の結果と一致する。

被験者の誤答からもう少し詳しくこのタイプをみてみよう。ここで予想される第一の誤答は，今述べたように後置修飾されていることにより，無条件で定冠詞を入れてしまうということである。

No. 11 を除いてすべて不定冠詞が正解である。確かに後置修飾を理由に機械的に定冠詞を入れたケースが多いことは，プロトコルコメントに「後ろから修飾されているから」というものが多いことからもわかった。すべてのケースにおいてプロトコルを収集した者のうち，一人以上が，多い場合は4名全員が後置修飾を理由に定冠詞を入れている。

しかし，無冠詞を入れた誤答も無視できないほど多い。たとえば，No. 37 や No. 9 は人数にすると45名中18名，14名がそれぞれ無冠詞を選んでいる。無冠詞を入れた率が比較的低かった No. 12 と No. 20 と他を比べてみると，名詞の抽象性の判断が影響していることが推測できる。つまり，No. 12，No. 20 はそれぞれ “television show” と “place” で具体名詞である。それに対して，たとえば No. 21 は “false picture of the real world”，No. 6 は “false sense of reality”，No. 37 は “twisted image of hospital emergency wards” と抽象性がより高い名詞である。このことから抽象名詞であるという判断で無冠詞とした者が多くいたということが想像できる。またプロトコルコメントからもこのことが裏付けられる。たとえば，上位群の二人とも picture の抽象性に言及し無冠詞としている。また，sense についても上位群の Y.M. が抽象名詞ということで無冠詞としている。Yoon (1993) が指摘するように，被験者は文脈よりも，名詞そのものの可算不可算の判断を優先して，冠詞を使用しているということがわかる。

これらのことから，このタイプの冠詞を決定するのに，学習者の行う判断がいくつかあることが理解できる。まず一つは，後置修飾による限定で定冠詞がくるという判断である。つぎに修飾を受ける名詞そのものが，抽象名詞であるか具体名詞であるかといった名詞そのものの特性に関する判断である。適切な冠詞を使用するためには，抽象名詞で不可算と判断しても後置修飾により定冠詞としたり，また名詞が後置修飾されていても，その対象が複数存在し一つに限定されない場合は不定冠詞あるいは複数無冠詞とするというように，判断の連関性が必要である。しかし学習者のプロトコルをみると，後置修飾されていることだけで判断するか，抽象名詞であるか否かといった名詞の特性だけで判断するかどちらかの者が多い。つまり必要ないくつかの判断が有機的に連動しておらず，単一の判断で冠詞を選択して

表8　タイプ6　問題番号別正解率

問題 No.（名詞）	正解率（%）	誤答率（%）	無記入（%）	上位群正解数	下位群正解数	差
3 (violence)	42	(a: 29) (the: 27)	2	7	3	4
7 (reality)	42	(a: 22) (the: 33)	2	7	3	4
1 (television)	40	(a: 22) (the: 36)	2	8	4	4
8 (television)	40	(a: 18) (the: 40)	2	8	4	4
4 (television)	36	(a: 9) (the: 53)	2	6	4	2
平　均	40					

いるように思われるのである。

タイプ6 ［−SR］［+HK］［−Count］

タイプ6に分類される5問中3問が “television” である。平均正解率は40%である。誤答をみると定冠詞を入れた者が多く，総称的な意味のものを特定されているとみなしてしまうことによる場合が多いように思われる。たとえば，No. 8（“...the greatest danger of［φ］television is that...”）では定冠詞を入れた者が40%となっており，プロトコルをみると上位の H.M. を除く3名が，その名詞の再出現を理由に定冠詞としている。とくに下位の H.C. は，前出しているものであれば機械的に定冠詞を入れている。

No. 1（“...on the influences of［φ］television... ”）は初出であるということを考えれば，学習者が頻繁に行う再出を理由とした定冠詞は使えない。実際，定冠詞を入れた者の数は，他の television が入るものと比べてわずかに減少している。その分，不定冠詞の誤答は増えている。不定冠詞を入れている者は初出であることと［+Count］の判断でそうしていると思われる。プロトコルでも M.Y., Y.M. はそのように判断して解答している。

No. 7（“...gives children a false sense of［φ］reality...”）と No. 3（“...he wasn't concerned with［φ］violence...”）といった “television” 以外の名詞のものをみてみると，まず No. 7 はプロトコルでは H.C. を除く3名が正答の無冠詞としているが，誤答の種類としては定冠詞，不定冠詞ともに多くみられた。No. 3 も誤答として定冠詞，不定冠詞ともに多くみられる。プロトコルでは上位の2名ともに無冠詞としているが，下位の M.Y. は初出で単数を理由に不定冠詞をつけ，H.C. は「暴力という行為に限られているから」といった自分なりの特定の仕方により定冠詞をつけている。

このタイプ6での誤答の原因は，タイプ5の総称と同様，一つは一般的な意味あいのものを特定されているとみなして定冠詞をつけてしまうこと，そして不可算名詞を可算名詞と誤解することに大きくわけることができそうである。特定されているか否かを判断するだけのタイプ1，タイプ2の定冠詞使用に比べて，さらに［±Count］の判断を必要とする不定冠詞，無冠詞の使用判断はより複雑であり，Takahashi (1997) が指摘するように学習者が困難を覚えているのは明らかである。

タイプ7 ［−SR］［−HK］［+Count］

このタイプは平均正解率が49%程度である。ここでの誤答も総称のタイプ5，6と同様，定冠詞が多く，文脈等から特定され得ると被験者が考えたことが推測できる。つまり，二度目の出現により定冠詞をつけるといったような単純な判断と，独自の関連づけや分類をして特定するという誤答である。たとえば，M.Y. は No. 23（“...whenever［a］character walks out of...”）のプロトコルコメントで，特定の登場人物でないにもかかわらず，「テレビのなかの登場人物」ということで特定されるとしている。

しかし，この場合の M.Y. の定冠詞使用についてはもう一つ問題がある。つまり，「テレビの中の登場人物」ということで独自に分類し，特定できるという判断で M.Y. は定冠詞をつけているが，「テレビのなかの登場人物」が一人に限定されるのか否か，他にもこういったカテゴリーに該当する者が存在しており，その中の誰でも良いのかといった点を考慮せずに定冠詞をつけてしまっていることである。特定できるという判断は［+SR］［+HK］と判断することであるが，この学習者は［+HK］と判断しただけで定冠詞をつけ，それ以上［±SR］を判断していないということである。

［±SR］を考慮せずに，［+HK］と判断しただけで定冠詞をつけるということには，母語である日本語

表9　タイプ7　問題番号別正解率

問題 No.（名詞）	正解率（%）	誤答率（%）	無記入（%）	上位群正解数	下位群正解数	差
26（taxi）	80	（φ: 7）（the: 11）	2	10	6	4
31（taxi）	73	（φ: 4）（the: 20）	2	8	6	2
39（kid）	62	（φ: 13）（the: 18）	7	7	4	3
13（automobile）	53	（φ: 18）（the: 24）	4	6	5	1
14（place）	53	（φ: 11）（the: 33）	2	8	3	5
32（taxi）	53	（φ: 20）（the: 24）	2	9	1	8
46（deal）	53	（φ: 27）（the: 11）	9	8	3	5
42（bed）	51	（φ: 0）（the: 40）	9	6	4	2
24（restaurant）	49	（φ: 13）（the: 36）	2	8	3	5
34（driver）	47	（φ: 11）（the: 40）	2	5	2	3
23（character）	44	（φ: 20）（the: 33）	2	5	3	2
41（intern）	42	（φ: 33）（the: 16）	9	7	2	5
52（mouthwash）	42	（φ: 36）（the: 11）	11	6	4	2
18（place）	33	（φ: 9）（the: 53）	4	8	1	7
43（kid）	33	（φ: 9）（the: 49）	9	3	3	0
44（deposit）	31	（φ: 33）（the: 27）	9	4	3	1
15（place）	27	（φ: 16）（the: 56）	2	6	1	5
平　均	49					

の影響があるように思われる。この M.Y. の No. 23 のプロトコルには，「そのテレビのなかの」とか「その枠のなかの」という言葉が現れ，独自の特定をして「その～」という連体詞をつけて解釈していることがわかる。一旦「その～」をつけて解釈してしまうと，単数複数の区別が厳格ではない日本語では，唯一か否かという判断があやふやになってしまって，それが英語に転移して，自動的に［＋SR］［＋HK］と判断しているのではないかと推測する。他の被験者についてはプロトコルをとっていないので断定はできないが，高見（1982）の指摘通り，被験者の多くが名詞の頭に「そのような～」とか「そういった～」という言葉をつけることによって，定冠詞の有無を判断しているようにみえる。

文脈から「そのような～」を名詞の頭につけて解釈できるということは，あくまで［＋HK］と判断できるということであり，唯一の対象であるか否かという［±SR］については保証しない。にもかかわらず日本語で「そのような～」をつけて解釈できれば，［＋SR］［＋HK］と判断しているように推測できるのである。

もし実際に「そのような～」とか「そういった～」をつけて解釈できることが，定冠詞使用の十分条件であると学習者が考えているならば，その際必ず［±SR］の判断をつけ加えるように指導すれば，タイプ5でみた後置修飾の問題と同様，正しく不定冠詞を使用する割合が向上すると思われる。

今までは不定冠詞を入れるところに定冠詞を入れるという類の誤答をみてきたが，無冠詞を入れた誤答もかなり多い。それも明らかに可算名詞であることがわかるような automobile, taxi, mouthwash, place, restaurant といった具体名詞の前にもかかわらず，無冠詞としている誤答が少なからず見られるのである。プロトコルからその原因を探ってみる。

例えば，No. 14（"... doesn't immediately find [a] parking place on the very first try."）において下位群の H.C. は，「どの駐車場とか言っていないので無冠詞にする」という判断を口にしている。H.C. の不可思議な判断はつぎのコメントにも現れている。No. 41（"... he even saw [an] intern..."）において「an のような気もするが，見習いの人は一人でなくいっぱいいるので無冠詞，でもそのなかのどれかの人にみてもらうなら an のような気がする」としている。つまり，H.C. は誰でもいいなら無冠詞，そして現実に唯一存在する人間なら不定冠詞を入れるという判断をしているようにみえる。H.C. はこのほかにも No. 13（"... where a person in [an] automobile..."），No. 18（"... be able to find [a] parking place..."），No. 39（"On TV they take [a] kid to an emergency wards..."）についても同様のコメントをして無冠詞

としている。

H.C. のこのような判断のもとをうかがわせるコメントが No. 34 (“have you ever said to [a] taxi driver?”) にみられる。「どのタクシードライバーとか決まっていないし，日本語で考えたら『あるタクシーの運転手さん』とか言ったら変なような気がする。『あるタクシーの運転手さんに言ったことがあるかい？』というのは文として変な気がする」というコメントをして無冠詞としている。

日本語で考えればここは「運転手なら誰でもいいが，誰かに言ったことがあるか？」という意味であり，それは唯一のドライバーを意味しているのではない。しかし，H.C. の判断は「ある～」がつけられないので，無冠詞とするというものである。H.C. にとって不定冠詞をつけるときは，「ある～」がつけられるか否かということが一つの判断基準となっていることがわかる。日本人中学生の冠詞使用を調査し，「(ある) ひとつの」という日本語が当てはまるかどうかが，不定冠詞使用の判断のもととなっていることを指摘した高見 (1982) の報告と一致する。

こういった判断の背景にある日本語の干渉について掘り下げて考えてみる。

この下位群の生徒は，英語の名詞の前に「一人の～」あるいは「ある～」をかぶせて意味をとろうとしており，日本語に訳してそれがうまくいく場合は不定冠詞を入れ，うまくいかない場合は不定冠詞を入れない。例えば日本語で「ある警官が道を教えてくれた。」と言えば，名前も知らないが「道を教えてくれた警察官」が確かに存在し，英語で言い換えればその冠詞はタイプ3 [+SR] [−HK] に相当する。また日本語で警官に道を尋ねた経験があるかという場合には「警官に道を訊ねたことはありますか？」と訊き，英語なら不定冠詞かあるいは any が入り，冠詞分類で言えばタイプ7 [−SR] [−HK] に相当する。したがって日本語で「ある～」を名詞の頭につけられるということは，現実にその対象が唯一存在することを意味する。たとえば「昔なんとか村にあるおじいさんがいました。」という文からもわかるように，実際に唯一の存在が必要である。「ある～」がつけられるには，タイプ3の特性である [+SR] が必要であって，[−SR] を特性とするタイプ7の文に「ある～」をつけて訳すと妙な日本語になる。そして，その日本語訳が自然かそうでないかの判断によって，H.C. は不定冠詞をつけられるか，つけられないかを判断しているようなのである。

よって，“A policeman showed me the way to the station.” といったタイプ3の文であれば，「ある警官が駅までの道を教えてくれた。」というように無理なく訳せるので不定冠詞を入れるが，“Why don't we ask a policeman the way to the station?” といったタイプ7であれば，「ある警官に駅までの道を訊きましょう。」といった「ある～」をかぶせた訳は少々妙な文なので，不定冠詞が入らないとすることが想像できる。不定冠詞が入らないとすることから，無冠詞を選択する判断まで距離があるが，名詞が特定されてもいないので定冠詞でもなく，消去法で無冠詞としていると推測できる。

どれほどの被験者がこういった判断をしているか定かではないが，可算であることが明らかな名詞に無冠詞をつけている誤答が多いことは，H.C. と同じ判断をしている者が多い可能性を示唆している。

逆にみれば，英語の名詞の前に「一人の～」あるいは「ある～」をかぶせて意味をとって，それが訳文的に成功するタイプ3では H.C. も不定冠詞を入れることに成功する可能性が強いと思われる。残念ながらここで使った英文にはタイプ3が1ケースと少ないことと，唯一のタイプ3である “...recently completd [a] study...” という名詞が抽象的に捉えられている可能性があるので，H.C. がタイプ3において，常に不定冠詞を入れるかどうかの証明ができないが，これは次回の課題としたい。

Ⅵ. まとめと課題

長文のクローズテストとプロトコル分析を用いて，冠詞の使用判断をみてきた。定冠詞の定着が早いとされる先行研究に対して，本調査ではタイプ別には正解率の差はみられなかった。しかし，後置修飾される名詞に対して，自動的に定冠詞をつけるといった誤答は多くみられ，タイプ5＊は他のものより正解率が低い傾向がみられた。

誤答の主たる原因は，文脈からの特定関係が理解できず，不定冠詞や無冠詞としたり，また独自に特定関係を想定して，定冠詞を入れるという [±HK] の誤判断と思われる。そしてそれに関連して [±SR] の判断を適切に組み合わせていないことも指摘できる。例えば，No. 23 (“...whenever [a] character walks out of...”) において，「テレビのなかの登場人物」が一人に限定されるか否かといった点を考慮せずに定冠詞をつけてしまうような，[+HK] と判断しただけでそれ以上 [±SR] を判断していない誤判断である。このことは先にあげたタイプ5＊の誤答に

も当てはまる。つまり，後置修飾により［+HK］と判断して，それ以上［±SR］を考えることがない誤答である。

そしてこういった判断の連関性のなさは，名詞の可算不可算性の判断だけで，文脈を無視して誤って無冠詞をつけてしまうということにも見られる。文脈的に［+SR］［+HK］となり定冠詞をつけるところを，名詞の抽象性から不可算として，無冠詞としてしまったことが推測される誤答が多くみられた。つまり，いくつかの判断を重ねなければならないところを，ひとつの判断で片付けてしまう傾向が指摘できる。

また母語である日本語の干渉もみられた。不定冠詞を「ある～」「一つの～」といった具合に学習しており，「ある～」をつけて訳すことのできる名詞には不定冠詞がつくが，そうでないものにはつかないと判断する誤答である。タイプ7の名詞についてのプロトコルによってこのことは明らかになったが，タイプ3を同じ被験者がどのように判断するかについて，さらに調査してみる必要がある。つまり，タイプ7について不定冠詞をつけないといった傾向だけでなく，「ある～」をつけて解釈できるタイプ3の名詞については，適切に不定冠詞をつけるのかさらに調査してみたい。

今回の冠詞調査については課題も多い。まず冠詞使用のタスクによって正解率が大きく変わる可能性があるので（Parrish 1987），クローズテストのみで結論づけるわけにはいかないということである。特に今回のような長文を用いた調査では，適切な冠詞挿入には読みの力が大きく関わっている。つまり，文脈的なつながりが読みとれないということが誤答に直結している。よって書かせたり，話させたりすることによって冠詞使用をテストした場合，文脈的つながりがわからないといった欠点はほとんど消えることになるだろう。しかし，反対に読み手にわからない特定関係を勝手に想定して，定冠詞をつけてしまうといった過剰使用もみられると思われる。

また一つの長文を用いたので，タイプによっては同一の名詞が多く出現したことも課題の一つである。たとえば，タイプ5の総称では“children”がほぼすべてを占めていた。その意味ではタイプ5の判断を適切に抽出できているとは言えない。つまり，何種類か異なった長文を与えていれば，タイプ別の正解率に違いがみられた可能性がある。

以上，さまざまな課題を残したが，それでも冠詞の正答率と誤答率からだけ習得状況や定着をみていた今までの先行研究に対して，プロトコル分析を併せた結果，誤答を引き起こす判断そのものに多少迫れたと考えている。

注

1) 分散分析において主効果等がない場合，通常多重比較には移行しない。しかし，この場合はP値が0.074であり，有意とはいかなくとも差のある傾向がみられたため，さらに詳しい情報を得るために多重比較を行った。

Ⅶ. 参 考 文 献

Bailey, N., C. Madden and S.D. Krashen. 1974. Is there a “natural sequence” in adult second language learning? *Language Learning*, 24, 235–243.

Berry, R. 1993. *Collins Cobuild English Guides 3: Articles.* London: Harper Collins.

Brown, R. 1973. *A First Language: The Early Stages.* Cambridge: Harvard University Press.

Dulay, H.C. and M.K. Burt. 1974. Natural sequences in child second language acquisition. *Language Learning*, 24, 37–53.

Grannis, O.C. 1972. The Definite Article Conspiracy in English. *Language Learning*, 22, 275–289.

Hakuta, K. 1974. A preliminary report on the development of grammatical morphemes in a Japanese girl learning English as a second language. *Working papers on Bilingualism*, 3, 18–42. Reprinted in E.M. Hatch (ed.), 1978. *Second Language Acquisition: A Book of Readings.* Rowley, MA: Newbury House.

Huebner, T. 1979. Order-of-acquisition vs. dynamic paradigm: A comparison of method in interlanguage research. *TESOL* Q., 13(1), 21–28.

Lindstromberg, S. 1986. Guidelines for teaching the English article system. *Cross Currents*, 13(1), 31–41.

Master, P. 1990. Teaching the English articles as a binary system. *TESOL Q.*, 24(3), 461–478.

McEldowney, P.L. 1977. A teaching grammar of the English article system. *IRAL*, 15, 95–112.

Parrish, B. 1987. A new look at methodologies in the study of article acquisition for learners of ESL. *Language Learning*, 37, 361–383.

Tarone, E. 1985. Variability in interlanguage use: A study of style-shifting in morphology and syntax. *Language Learning*, 35, 373–395.

Tarone, E. and B. Parrish. 1988. Task-related variation in interlanguage: The case of articles. *Language Learning*, 38, 21–44.

Takahashi, T. 1995. Important distinctions for the acquisition of English determiners by EFL learners. In

Department of English Language Education of Hiroshima University (ed.), *Studies in English Language Education: A Collection of Essays Published in Commemoration of Professor Mikio Matsumura's Retirement from Office*, 134–144. Hiroshima, Japan: Keisuisha.

Takahashi, T. 1997. Japanese learners' acquisition and use of the English article system. *Edinburgh Working Papers in Applied Linguistics*, 8, 98–110.

Thomas, M. 1989. The acquisition of English articles by first-and second-language learners. *Applied Psycholinguistics*, 10, 335–355.

Whitman, R.L. 1974. Teaching the article in English. *TESOL Q.*, 8(3), 253–262.

Yamada, J. and N. Matsuura. 1982. The use of the English article among Japanese students. *RELC J.*, 13, 50–63.

Yoon, K.K. 1993. Challenging prototype descriptions: Perception of noun countability and indefinite vs. zero article use. *IRAL*, 31(4), 269–289.

浅野敏朗. 1988.「英語冠詞について――その指導法確立のための一序論――」『京都教育大学教育実践研究年報』第4号, 127–140.

大西泰斗, ポール・マクベイ. 1995.『ネイティブスピーカーの英文法』東京：研究社.

高塚成信. 1990.「中学校英語教育における基本的指導事項の検討(2)：後置修飾される名詞句の冠詞」『岡山大学教育学部研究集録』No. 83, 39–51.

高見健一. 1982.「中学生の冠詞習得と ERRORS」『英語科教育研究』大阪教育大学大学院英語科教育談話会, No. 3, 93–101.

正保富三. 1996.『英語の冠詞がわかる本』東京：研究社.

山田　純. 1981.「冠詞指導法の開発」*ELEC Bulletin*, No. 73, 6–10.

Ⅷ. Appendix

(1)

Dr. Heinrich Applebaum recently completed a study on the influences of [1. ϕ] television on [2. ϕ] children. In his case, though, he wasn't concerned with [3. ϕ] violence, but how [4. ϕ] television gives [5. ϕ] children [6. a] false sense of [7. ϕ] reality. Dr. Applebaum told me, "The greatest danger of [8. ϕ] television is that it presents [9. a] world to [10. ϕ] children that doesn't exist, and raises [11. ϕ] expectations that can never be realized." "I don't understand, Doctor," I said. "Well, let me explain. Have you ever seen [12. a] television show where a person in [13. an] automobile doesn't immediately find [14. a] parking place on the very first try?" "Come to think of it," I said, "I haven't." "Not only is there always[15. a]parking place available but [16. the] driver doesn't even have to back into it. There are two parking spaces available whenever someone on TV needs one. [17. ϕ] children come to believe that when they grow up they will always be able to find [18. a] parking place when and where they want it. Can you imagine [19. the] shock when they discover that in real life you can drive around a block for three hours and still not find [20. a] place to put your car?" "I never thought of it but it's true."

(2)

"What else on TV gives [21. a] false picture of [22. the] real world?" I asked Dr. Applebaum. "Have you noticed that whenever [23. a] character walks out of [24. a] restaurant or office building and says to [25. the] doorman, 'Get me [26. a] taxi,' [27. the] taxi immediately arrives? [28. ϕ] children get [29. the] impression that all a doorman has to do is blow his whistle and a taxi will be there. I have never seen [30. a] show where the doorman has said, 'I'm sorry. I can't get you [31. a] taxi. You better take the bus'." "I never knew before what bothered me about those TV action programs, but now I do. There is always [32. a] yellow taxi waiting off [33. the] screen." "Now," said Dr. Applebaum, "have you ever said to [34. a] taxi driver, 'Follow that car and don't lose him?'" "Not really." "Well, if you had, [35. the] driver would have told you to get out immediately. No taxi driver is ready to follow another car because they don't want to get involved. But on TV every taxi driver looks as if he'd like to drive 90 miles an hour through a wet street trying to keep up with a runaway. And the worst thing is that the kids believe it."

(3)

"What else have you discovered, Dr. Applebaum?" "[36. ϕ] kids have [37. a] twisted image of [38. ϕ] hospital emergency wards. On TV they take [39. a] kid to an emergency ward and four doctors come rushing down to bandage his leg. In real life [40. the] kid would be sitting on the bench for two hours before he even saw [41. an] intern. On TV there always happens to be [42. a] hospital bed available when [43. a] kid needs it. What the kids in this country don't know is that sometimes you have to wait three days to get a bed and then you have to put [44. a] deposit of $500 down for it." Dr. Applebaum believes that the most serious deception of all is a lawyer defending his client on [45. the] screen. "On TV the lawyer spends day and night searching for the evidence to clear his client. In real life the lawyer says to the client, 'Look, I've got 20 minutes. Tell me your story and then I'll plead you guilty and make [46. a] deal with [47. the] DA.' [48. The]client might say, 'But I'm

innocent.' [49. The] lawyer would say, 'So what? I can't afford to find that out. I'm not Perry Mason'." "Then what you're saying, Dr. Applebaum, is that it isn't the violence on TV but the fantasy that is doing harm to [50. ϕ] children." "Exactly. Even the commercials are to blame. [51. ϕ] children are led to believe that when they grow up if they use [52. a] certain mouthwash they'll find [53. the] mate of their dreams. When they don't find him or her after gargling all night, they get deeply disappointed and many of them never come out of it."

注　2つ以上の冠詞が入りうるもの，イディオムおよび形容詞の最上級形，また一度しか出現しなかったタイプ 3 は除いている。